

——ほ——：：：ほ——：：：

：：：どこかでフクロウが鳴いている。

起きているのか、寝ているのか、はつきりしない曖昧な意識で、あたいはその声を聞いている。

自分がベッドに横たわっているのは分かる。夜明けが近いというのも分かる。しかし、体は指一本動かない。それに抗うだけの理性を、まだ完全に起ききっていないあたいの脳が働かせることはない。

その感覚がなんとなく分かるのは、なんとも変な心持ちだったが、不快ではなかった。それでそれに任せた。

夜気の冷たい空気が顔を撫で、温まった布団の中との温度差に気付く。

首から下がぬるま湯に浸かっている、首から上が氷水に突っ込まれているように感じる。

極寒の戸外、周りは凍えるように寒い

に、自分は何枚もの服を重ねているのでちっとも寒くない。それに似た奇妙な安心感と恍惚感に、あたいは身を委ねている。冬の早朝の微睡みタイム。このまま時が止まってくれたらと頭の隅っこで願わずにはいられなかった。

「：：：ひいえつくしっ!! あゝさむ……」

：：：しかし、そんな心地よい時間も、盛大な生理現象によって破られる。

首までしっかりと布団をかけているが、体の膨らみで持ち上げられて、いつの間にか肩の辺りに冷気がまとわりついていた。寒い。布団を引き上げて頭までかぶろうとする。でも、その前にいま何時なのか確かめてみることにした。

：：：ごそごそ

がたっ

いつもやかましく鳴り響く、枕元にいつも置いてある目覚まし時計を手探りで探

し、寝ぼけ眼で文字盤を凝視する。

ずっと閉じられていた瞳が冷たい外気に慣れるのに相当の時間がかかった。

「……なんだよ……なんだよ……まだごじじやんか……ねよ」

がたっ

……ごそごそ

時計を置き直し、今度こそ布団をかぶる。冬の季節の二度寝に勝る快感は無いと思う。

……

——ほ……ほ……

……

「……ん？ なに……？」

ふと、こめかみの辺りに冷たいものを感じた。

天国のごとき温かい布団の中から二度も手を出すのは躊躇われた。が、なんとなく気になったので、意を決して外に出す。

こめかみに触れると、確かに何かがついていた。親指と人差し指でそれを弄くってみる。

「……なに？ このつめたいの。みず？」

……あれ？」

あたいは、そこで初めて違和感を感じた。

……

……

……

布団を跳ね飛ばすようにして身を起こ

し、そして上を見上げる。

ベッドの上からいつも見ていた天井に

加え、真つ暗な空が覗いていた。あたいの

頭上以外の天井がすっぽりと無くなって

いて、下にはベッドの高さまで雪が積もっていた。

左右を見る。昨日と変わらない壁がある。

正面を見る。まだ夜が明けきらない森の風景がどこまでも突き抜けていた。

「な………なにこれ………」  
あたいは、呆然と目の前の光景を見つめた。

………

——ほ——ほ——

フクロウの声が、あたいをバカにしているような気がした。

◇

不幸ってもんは、予期せず、前触れなく、いきなりやってくることが多い。

自分では普通に生活していても理不尽にやってくる。呼んでもいないのにやってくる。

目に見えないから防ぎようもない。目の前に現れてからでは遅すぎる。

そして、風のように去っていく。  
本当に厄介なものだ。

不幸は掃いて捨てるほどその辺に転がっている。かく言うあたいの身辺も、小さな不幸は事欠かない。

朝起きて寝ぼけて洗面所に向かう途中で左足の小指を思いっきり柱にぶつける。爪を切っている最中に手が滑って生爪を剥ぐ。

買ってきた文庫本を読んでいると百六十七ページ目に誰のともつかない鼻水と涎がついている。

客が来なくて暇だったので居眠りしていると普段はめったに様子を見に来ない上司がやってきてお説教を食らう、など。

………最後の自業自得だという声が聞こえたが聞こえないふりをする。

ま、それはさておき。

あたいは、こんな仕事をやってるのだから当然なのだが、不幸で死んだ人間を何人

も見てきた。

天災。交通事故。突然の病死。火事。階段から転げ落ちる。餅を喉に詰まらせる。目を覆いたくなるような酷いものから、笑い話にしかならないようなものまで色々あった。

これらの不幸でどれも共通して言えるのは、自分の意思を介さない、自分の与り知らない意志に殺されているという点なのだが、ここで人間が誤解しているのは、不幸は必ずしも神様が起こしているわけではないということだ。

つまり、様々な要因が重なって事故や病死が起こるのが大抵で、人はそれを『不幸』と呼んでいるに過ぎない。『不幸』の裏には『原因』があるのだ。

例えば交通事故。外の世界には交通规则というものがあるらしい。それに沿って行動すれば、事故に遭遇する確率は格段に

低くなる。

例えば病死。自分の生活習慣を省み、体に優しい生活を送れば、突然おつ死ぬことはまずなくなる。

事前の準備さえ整っていれば、天災さえも逃れることが可能だ。

だけど、道を歩いていると突然地面が割れるんじゃないかとか、そんなことをいちいち考えていたら日常生活をおつかないびつくり暮らさなければならなくなるので、適度な注意で充分だ。それをきちんに行い、その努力が積み重なると、未来に起こる大きな不幸を未然に防ぐことができるのだ。

だから、「おれは不幸だ」と思い込むことと自体が間違いで、実は不幸は、ある程度は自分で回避できるものなのだ。

不幸に腹を立てているやつほど不幸を回避する努力をしていない。だから、小さな不幸が積み重なる。気づかないうちに

「不幸様、いらつしやいませ」と両腕を広げているわけだ。

そして不幸が続くと、ちよつとしたことで怒り、嘆き、どんどん心が貧しくなる。

やがて、周りの人間にあたるようになり、諍いが生まれ、人は周囲から離れていく。

逆に不幸を回避する努力をすると、自然、不幸に遭う確率は下がる。

心は豊かになり、生活に潤いが出る。小さなことにいちいち腹を立てなくな

り、人当たりも良くなり、人との繋がりが強固なものになっていく。新しく生まれる

こともあるだろう。不幸を回避する努力を怠ることは、それ

だけで閻魔様のお説教の対象となる。自分だけならまだしも、もしかしたら周りの親

しい人や、自分に全く関係のない人たちを不幸に巻き込むことにもなりかねない。

だから、自分にできる最大限の努力をし、

不幸を未然に防ぐことは、小さいけれどかけがえのない善行なのだ。

：：と、まあ：：

あたいは、つい最近、上司の閻魔様から食らったこの説教の大切さを、今、この上なく噛みしめている：：。

「はあ：：」

溜め息をつくると、白いもやが顔を覆い、やがて空気に霞んで消えていく。

空からは白い雪がちらほらと舞い降りて、目の前を上から下に通り過ぎてゆく。

時折、首に巻いたマフラーの間から首筋に入り込んで冷たかった。

見渡す限りの銀世界。雪の帽子と衣を纏った大小の石ころ。変わることなく流れ続ける三途の川と、その上にたゆたう一艘の舟。

あたいの目に映る彩色の乏しい風景は、あたいの心持ちをそのまま表しているような気がした。

ここは、無縁塚。死者の魂の行き交う場所。そして、あたいの仕事場だ。

あたいは、いつも昼寝をしている大きな岩の上に腰掛けて、沈鬱な気持ちで頬杖をついていた。

いまは目下仕事なのだ、そんなことをしている暇がないほどの事態に置かれているので勘弁してもらいたい。

足元には、あまり趣味がいいとは言えない、どどめ色の風呂敷包みが置かれてある。中には、あたいの普段着や仕事着の替え、貯めた金を入れるブタの貯金箱、その他もろもろの生活用具が入っている。

あの状況下でこれだけの物を持ってこられたのだから、上等といえるかもしれない。今日の朝。

あたいは盛大なくしゃみをかまして目を覚ました。

いつもやかましく鳴り響く、枕元にいつも置いてある目覚まし時計を手探りで探し、文字盤を見ると午前五時。

ありえねえ、と思いつつ、二度寝しようと思つて寝返りをうつと、顔に冷たい物が落ちてきた。

触ってみると、氷のように冷たい水だった。

やがて、目が慣れてくると、その目に飛び込んできたものを認識して一発で目が覚めた。

いやー、びっくりしたね。

あたいの寝ている横に、見慣れた森の雪景色が広がっていたんだから。

最初は新手のドツキリかと思った。

その辺であたいの反応をほくそえんでいるやつらをきよろきよろしながら探し

たが、ついに、それらしき者は見つからなかった。

で、ここに来てようやく自分の身になにが起きたのかを理解し始めるわけだ。

悪い冗談のようで、紛れもない現実。長いこと生きてきた中でも、トツプ3に入

るくらいのとびつきりの不幸だった。……というか、なんで目が覚めなかったんだらう。

「うはああああああ……」

再び自分に降りかかった不幸を思い出して、大量の溜め息をつく。今日何回目かな。

まあ、簡単に言うとは。

あたいは今、家無き子なのだ。

今年は例年になく雪の量が多かった。

大雪、というカテゴリーを超越するかのごとき大雪が、年越しから年明けまで何度も降った。

幻想郷に住む連中は雪かきに追われ、居住空間を確保するのにてんやわんやだったらしい。

そりゃ、あたしも雪かきしたさ。雪かかないと、家の中に入れないほど降ったんだもの。

雪っていうのは水が固まってできたもんだから、ものすごく重い。毎日、舟漕いでる仕事をしてなきや筋肉痛になつていただらう。

……その時、気づくべきだったんだ。

あたいの家の薄っぺらさに。

あたいの家は木造茅葺の平屋だった。決して頑丈な造りではなく、雨風凌げれば上等だというほったて小屋だ。

雪が屋根に一メートルも積もれば、充分オシヤカになるであろうと予想できた。

でも、生来のあまり物事に構わない性格のせいで、あたいは玄関の前の雪をどかし

て家の中に入れては良し、としてしまったのだ。

雪かきは確かにした。だけど、『屋根の上』まではしなかった。こんな事態になるかもしれない、という考えが及ばなかった自分のオツムが恨めしい。

しかし、いまさらそんなことを嘆いても遅いわけで、実際に事は起きてしまった。

もう、この家には見切りをつけ、仕事場でこれからどうするかを考えたい方がいと思つたあたりは、半分ほど雪に埋もれたタンスの引き出しを開けて寝巻きから仕事着に着替え、そして雪の中から物を発掘し始めた。

瓦礫と雪で大方の物は押し潰されてしまったが、それでも、わずかな物を懸命に掘り起こして風呂敷で包み、ついさつき、ここ無縁塚にやってきたのだ。

これから、どうするべきか考えなくては

ならないのだが、シヨックが大きすぎて思考が止まってしまっている。

いま頭の中で巡っているのは、朝起きてからの回想と、潰れた家との思い出だった。実家から離れ、初めて建てた自分の家。粗末ながらも思い出の詰まった第二の我が家。愛着が無いといえば嘘になる。

しかし、それ以上にあたいの頭の大半を占めていたのは、

「うう……ローンが残っているのに……」  
借金のことだった。

◇

『なあなあ。あんた船頭さんだろ？ この川を渡りたいんだが、お願いできるかい？』

無縁塚に来てからのどのくらい悶々としていただろうか。



端から見ても黒げな重い空気を背負っていたであろう、あたいの背中にも声がかかった。

緩慢に振り向くと、一人の霊がそこにいた。七十代くらいのじいちゃんだ。どうやら、今日最初のお客らしい。

「あり、いらつしやい。三途の川にようこそ、つてね。じゃ、早速行きましようか」  
覇気のない返事をして、のろのろと立ち上がると、じいちゃんをあたいの舟に案内した。

三途の川の渡航ルールをじいちゃんに教え、金を貰って出航した。

じいちゃんが持つていた金は、六文。三途の川を無事に渡りきれぬ最低金額だった。

三途の川は、霊の持つている金に依じて、川幅が変わる。多ければ多いほど狭くなり、

少なければ少ないほど広くなる。

そして、三途の川は霊にとって毒となる気が充満していて、長時間川の上にいると霊は毒気にあてられて消滅してしまう。

六文は、霊が百パーセント川を渡りきる事ができるギリギリの金額なのだ。それより少なくなると渡れない者が出てくる。生前に大きな罪を犯した者や、人を信じずに一人孤独に生きてきたようなやつらは六文を切っていることが多い。

だから、あまり金を持つていない霊は死神からは嫌われる。貰った金の割りに渡航に時間がかかる可能性が高いからだ。

ゆえに、船頭死神は金を多く持つている霊を優遇せよ、と指導される。

金が多い霊を優遇すれば、霊を彼岸に渡す効率が良くなる。また、金の多さは生前の徳の多さに比例するため、人間に善行を促すことにも繋がる。

死神は金を稼ぐことが善行である。これはあたいの上司の口癖だ。

しかし。あたいはこれに真つ向から反抗することばかりしている。

あたいは、霊が彼岸に渡してくれと言つたら絶対に拒まない。それがどんな大悪人であろうともだ。

一見、この行為は善い行いのように見えるが、実は、これはあたいの趣味だ。

あたいがこの仕事が好きなのは、外の世界の霊と話せるからだ。

幻想郷とは違う世界に住む人間。そいつらは一体どんな暮らしをしていて、どんな考えを持っているのか。それに興味があつた。

人間は百年に満たない短い寿命ながら、実にいろんなことを考えて生きている。

善人だろうが悪人だろうが、それぞれ生きてきた人生は一つの物語であり、下手な

本よりよつぽど面白い。

様々な物語を聞き続けて数十年。あたいは死神の中でも外の世界の情報通である  
と自負していた。

「はあ……」

……いつもなら、今日最初のお客さんであるこのじいちゃんの話にも耳を傾けながら、えつちらおつちら対岸まで行くはずだった。

しかし、今日は仕事のモチベーションが限りなく低い。他の事を考えていられるほどの余裕がない。

本当なら仕事などせんで、これからどうするのかを思索しなければならぬのだ。今回ばかりは、あの人も大目に見てくれるだろう。

『船頭さん、なんか悩みごとでもあるのかい？ さつきから溜め息ばかりだね』  
まだかろうじて、あたいらが出発した岸

が見えるくらいまで川中を進んだ時、舟の真ん中辺りに座っていたじいちゃんがあたいの落ち込んだ様子に気付いて声をかけた。

お客さんに気を遣われるとは情けない。まだまだ船頭としての精進が足りないようだ。

「ん？ ああ、まあね。ちよつと困ったことになつちまつてさ」

『困ったこと？』

「うん、そう……」

そう言つて、あたいは口を噤む。話したところで、このじいちゃんに家を造つてもおえるわけでもない。それに、船頭の悩みをお客さんに話すわけにもいかないだろう。

つまらないこと聞かせるより、じいちゃんの前のお話をしていた方がよつぽど有意義だ。

あたいが何を聞こうか考え込んでいると、不意にじいちゃんが口を開いた。

『あんな宿無しかい？』

あたいは舵取り棒を動かすのをピタと止め、後ろを振り向いた。

目を見開いて驚いた顔をしているあたいに、じいちゃんは黒ずんだ歯を見せてニカツと笑つた。

『当たり前かい？』

「……参つたね。そんなに分かりやすいかね、あたいは」

『いや、わしは生きてるときに、あんなみたいなのを嫌というほど見てきたんだ。目を見れば分かる。あんなは家を失くしたか、だれかに取られたかしたんじゃないかい？』

「へー」

おもしろいもんだ。宿無しになつたなんて、よつぽどじゃないと見抜けないと思う。

一体何者なのだろう。じいちゃんの人生に興味を引かれた。

しかし、あたいはそれ以上に、この人に聞きたいことがあった。この偶然は何かのお導きかもしれないし。

「その通りさ。あたいは今朝宿無しになった。今年は雪が多かっただろ？ それで屋根を潰されてね。命が助かったのは幸いだっただけ、代わりに住むところを失くしちまったってわけ」

『そりや何よりだ。命あつての物種だ。死ぬじまっちゃあ何もならない』

「その通りだね。ま、問題はこれからどうしようかってことなんだけど……お前さん、こういう哀れなやつはどうしたらいいか知ってるかい？」

『そりやあ簡単さあ』

「へ？」

じいちゃんがあまりにも容易く答えを

口にしようとしたので、思わず間抜けな顔をしてしまった。

『人の世は情け。困っているときはお互い様。あんたは困っているやつを見つけたら手を差し伸べようとするだろう？ なら逆に手を差し伸べられても全く変じゃあない』

「……つまり、どっかに泊めてもらえってことかい？」

『あんたも友達の人や一人一人いるだろう？ そいつらに拝み倒して泊めてもらいな。なに、立て直せるまでの辛抱だ。どっかに移れるだけのまとまった金ができたら、すぐに引き払えばいいんだ。野宿と家の中じゃあ、ぜんぜん違うぞ。だから、迷惑にならないように、隅っこにでも住まわせてもらいなよ』

「……そうだね。それがいいかも」

野宿をするにはこの季節は辛い。借家を

借りるほど金が無い。

それなら、知り合いに泊めてもらうのが一番現実的だ。あたいは無職じゃないので、金や物を入れることはできる。

他人との繋がりがあれば、こういった困った時に助けてくれる人はいくらでもいる。

あたいは、そういう因果の仕事をしていく。だから、他人に頼れる頼もしさをよく理解していた。

「分かった。お前さんをあっち側に送り届けたら、泊めてもらえそうなところを考えしてみるよ。アドバイスありがとね」

『いや、これくらい、何でもないよ』  
「それにしても、お前さんも宿無しになつたことがあるのかい？　なんだか、こういう時にどうしたらいいのか詳しいね」

『んん？　そりや当たり前前さあ』  
じいちゃんは得意げに理由を言った。

『なんてつたつて、わしや五十のときから死ぬまで宿無しだったからなあ』

「ホームレスかよ!!」

あたいの突っ込みと、じいちゃんの笑い声が辺りに響いた。

『じゃあな、船頭さん。いい家を見つかるよー』

「はいよー。お前さんもきっちりお説教受けてきな」

手を振ってじいちゃんの背中を見送つた。

数時間しゃべっている間にすっかり仲良くなった。

ホームレスでも、やることやつてれば三途を渡るんだなあと実感する。波乱万丈に満ちたじいちゃんの身の上話は、ここ最近じゃ一番面白い物語だった。

「……さて、と。それじゃ、これからどう

しようか真剣に考えようかね」

じいちゃんの中が小さくなるまで見送ると、あたいは元来た岸に向けて舟を漕ぎ出した。

帰りは、川幅が渡し賃に左右されないの  
で、十分もあればあっち側に着く。

雪はもう降っていない。雲はだいたい薄くなって、お天道様の光が雲を透かして白光っていた。昼頃には青空が見えるだろう。「まずは……泊めてくれそうな人材を挙げてみようか」

思いつくまま、知り合いの顔を空に浮かべてみる。

あたかも友達がいらないわけではないので、行く先には幾つか心当たりがあった。

真っ先に思いついたのは、我が上司、四季映姫閻魔様のところ。

このお人は、閻魔専用のたいそう立派な寮に入っている。以前遊びに行った時に、

閻魔ってこんなに待遇がいいのかと驚いた。

内装も綺麗だし、賄いもうまい。部屋も広いので、あたいたい一人が入っても、別に大丈夫のように思える。

「ただねえ……」

問題が幾つかあった。

一番の問題は、その寮が『閻魔専用』であるという点。

閻魔っていうのは規律が服来て歩いていけるような人ばかりだから、規則やルールには滅法うるさい。閻魔しか入れない寮なら、閻魔しか入ってはいけないのだ。あたいが家をなくしたっていうことを考慮しても泊まることは難しいだろう。

閻魔が規則を破るには相応の覚悟がいるのだ。あたいが四季様を頼ったら、四季様に迷惑をかける可能性がある。あたいは、あんまり真面目に仕事をしていないから

ね、これ以上氣苦勞をかけるのもどうかと思ふし。

それに四季様と一緒にいたら、あの長い説教を毎日受けることになりそうだ。あの説教癖がなければいい人なんだけどねえ。よつて、四季様のところはやめとくことにする。

もう一つは、あたいと同じ仕事をしている死神仲間のところだった。

意地は悪いが氣のいいやつらばかりで、たまの休みには、たむろして店をひやかしたり、スポーツなどにも興じたりしている。氣を遣わなくていいところが最大の利点だ。

「ここが一番妥当なんだけど……」

残念ながら、ここでも問題があった。

それは性別。あたいの船頭仲間には、女が一人もないのだ。

いや、落ち着いて考えてみれば、その理

由はすぐに分かる。『船頭』なんて仕事を、女が好き好んでやりたがるだろうか。

あたいみたいな変わり者なんかを除けば、普通の女なら力仕事と外仕事は敬遠する。船頭死神は、男が九十パーセント以上を占める男性主体の職業なのだ。

あたいが船頭を始めて数十年。あたい以外の女の船頭には、片手で足りるくらいしか会ったことがなかった。

そいつらも、あたいとは違う部署に回されているから、同じ職場で働くのはかなり先だろう。何十年先か、何百年先か。考えただけで氣が遠くなる。

てなわけで、あたいにとって友人と呼べる死神仲間は男しかない。

男と女が一つ屋根の下に暮らす。世間ではそれを同棲という。

一応、あたいにも世間体というものがあるので、変な噂が立つのはあまりよろしく

ない。あいつらとは適度に距離を置いた気安い関係でいたいのだ。

よってこれも没。

「早くも候補が二つ潰れたねー……」

なかなか前途は多難だ。

いっそ、あたいの実家から通おうかとも思ったが、あたいが仕事場近くに引越してきたのは、実家がものすごく遠いところにあるためであって、通勤するだけで疲れてしまう。

ものぐさな性格なのでできればそれは避けたい。実家は泊めてくれる先が見つからなかった時の最終手段だ。

「まあ条件としては、まず女の知り合いか。それで、気を遣わない程度に親しいのが望ましい……」

舟を漕ぎながら考える。そんなやつなんて、いたかなあ……。

「……あ、そうだ……」

ふと、思いついたのは、去年知り合ったばかりのやつらの顔だった。

あたいの知り合いは、なにも彼岸に限ったわけではない。

去年の春に起こった季節外れの花の大開花。その時、あたいは何人か下界のやつと知り合った。

そいつらとは頻度は少ないものの、たまに会って話をしたりしている。

その知り合いは、いずれも女ばかり。一つの条件はクリアしている。

しかも、ドライというか、人にあんまり構わない性格のやつらが多い。頼みこめば小さな部屋の一つくらい貸してくれるかもしれない。

「そうか……結構いけるかも……?」

ならば、そいつらの中からよさげな人材をチョイスしてみよう。

野宿でもへっちゃらな妖怪や妖精は除



く。どこに住んでいるのか分からないやつも除く。

屋根がないと生活できない人間か、自分で家を構えているシヤレた妖怪を選ぶ。

そうすると、どんな条件は絞れてくる。うらぶれた博麗神社という神社の巫女をやっている、博麗霊夢。

魔法の森に住んでいる魔法使い、霧雨魔法。

吸血鬼の館、紅魔館のメイドをしている、十六夜咲夜。

竹林の中のお屋敷、永遠亭で働いている兔、鈴仙・優曇華院・イナバと、因幡てゐる。

そして、死者の国、冥界のお屋敷、白玉楼で庭師をやっている、魂魄妖夢。

こいつらが候補にあがる。  
「この中から泊めてくれそうで、かつ、できれば快適な住まいを提供してくれそうなのは……」

まず、最初の二人は消える。

博麗霊夢は自他共に認める赤貧だ。一人暮らしとはいえず、毎日の生活にいつぱいっばいだと聞く。食費が増えるのを、はたして歓迎してくれるだろうか？

まあ、食費はなんとか自分で用意できるとしても、住人が一人増えれば、必然的に食費以外の物がいろいろ必要になる。金が無いところに、泊めてくれ、と頼むほど、あたいは図々しくない。

そして、霧雨魔法。以前、暇つぶしにあいつの家に行つたことがある。そこであたいが目を丸くしたのは、アホみたいに片付けられていないあいつの家の中だった。あんな所に住んだら、いつ、物の雪崩が起こつて生き埋めになるか分かつたもんじゃない。一言で言うなら住みたくない家だ。

今のあたいは四の五の言つていられる

状況ではないのだが、命が危うくなるような所に住むほどの度胸はない。

すると、残るのは、紅魔館と永遠亭と白玉楼だ。

紅魔館は音に聞こえた吸血鬼、レミリア・スカーレットお嬢様の住むお屋敷だ。超ブルジョワだ。

あたいたいみたいな妖怪一匹が増えたところで、どうということはないだろう。咲夜とコネクションを持たたのは結構幸運だったかもしれない。

ただ、一番の難点は、あそこのお屋敷は吸血鬼が主であるということだ。

紅魔館の内部は、昼間でもカーテンが閉められて真っ暗だ。外に出ないとお天道様を拝めない。考えただけで息が詰まりそう

だ。食う物も、人間の肉や血ばかりで栄養のバランスが偏りそうだ。

頼み込むメリットはあるが、いざ住むとなると気が滅入る可能性がある。紅魔館は少し厳しいかもしれない。

次に永遠亭。あんな所に屋敷があったとは、長いこと幻想郷に住んでるあたいでも知らなかったが、かなりのお屋敷だった。あそこの主は、天狗の新聞でしか見たことのないので、どんなやつかは分からない。でも、行ってみる価値はある。てゐは性格が悪そうだったが、鈴仙は丸そうだった。頼めば主に話を伝えてくれるかもしれない。

最後に白玉楼。ここには、彼岸以外で一番親しい知り合いである魂魄妖夢がいる。仕事をサボって、たまに冥界に赴き、いろいろと話をしたり、お茶なんかをもらった

りしている。大体、仕事の途中に乱入するので迷惑がられてる節もあるが、それでも律儀に応

対してくれる。

妖夢は、物凄く礼儀正しくて、いい子だ。それに素直でからかうと面白い。あんな妹がいたら、可愛くってしょうがないことだろう。

泊めてくれと頼むなら、冥界が一番頼みやすい。妖夢の主である西行寺のお嬢様には会ったことはないが、それは永遠亭も同じなので、頼むならどっちも同じだ。

「よし……結論が出たね」

行ってみるところは、永遠亭と白玉楼。まずは、一番泊めてくれる可能性が高い白玉楼に行つて、そこがダメだったら永遠亭だ。

あたいたしとしては、白玉楼に望みを懸けている。なんといつても死者の家。あたいは最もなじみが深い。一発で決められるように、誠心誠意を込めて頼んでみよう。

舟のへりはやがて棧橋に着いた。

あたいは舟から飛び降りて、舟をロープでくくりつけると、持つて来た風呂敷包みを背中に背負った。

「さうで。どうなることやらね」

いまにも光を零しそうな空を見上げ、期待と不安の板ばさみになりながら、あたいは雲の向こうに向けて飛び立った。